



2009年度は当センターの海外提携機関より、4名の招聘研究者をお迎えしました。

名前	所属	招聘期間
張新朋	浙江工商大学日本文化研究所 教員	1月11日～1月30日
潘倩菲	華東師範大学文芸民俗学専攻 博士課程	1月21日～2月10日
白松強	中山大学中国語言文学系民俗学専攻 博士課程	2月7日～2月27日
Park Jeongeun	ブリティッシュコロンビア大学アジア研究専攻 博士課程	2月14日～2月28日

日本に現存する中国宋元代以降禅僧の頂相に関する調査報告



張新朋（浙江工商大学）

頂相は元來、頂髻の相といい、その後転じて禅宗祖師及び先徳の肖像画を指すようになった。如来の無間頂相になぞらえてそう呼ばれたものである。頂相は中国にはじまり、比較的早い時期に隣国日本へと伝来した。例えば、真言五祖である善無畏・金剛智・不空金剛・一行・恵果の頂相は、唐代に帰国した日本僧空海により日本へ持ち帰られている。その後、付法信物の一つとして、頂相は入唐求法日本僧により珍藏の法宝と看做されるようになり、そのため日本には日本僧達を持ち帰った中国高僧の頂相画が比較的多く蔵されているのである。同時に、日本の禅林は初期の模倣の段階を経て、中国の頂相形式を消化吸收し、その基礎の上に日本独自の頂相形式や風格を確立していった。また日本の禅林には日本の高僧大徳の頂相も多く伝存している。これら高僧大徳の頂相画の調査研究には以下のような意義がある。

- (1) 頂相画の調査研究を通じ、関連する中日両国の仏教宗派間における授受流行を知ることができ、さらに中日仏教交流の状況を明確に把握し、宗教交流の側面から当時の中日文化交流について論じることができる。
- (2) これらの頂相画の調査研究を通じて、頂相創作時の人々の思想や美意識を探ることができ、当時の文化的背景をより深く理解することができる。

- (3) 頂相は通常像主の自賛や別人の賛語を伴っており、これらの賛語は中国編纂の高僧大徳の文集中にはあまり収録されていない。これら賛語を収集し研究することを通じて、著賛者の文集に収められなかった不備を補うことができる。それと同時に、著賛者の求法活動における理念や心境を探ることもできる。

今回の考察は、日本所蔵宋元以降の高僧の頂相を主要調査対象とするものであり、筆者は主に神奈川県図書館、神奈川県立歴史博物館、金沢文庫、東京国立博物館、駒澤大学禅文化歴史博物館、駒澤大学図書館などの所蔵機関において資料調査を実施した。また福田先生の引率の下、鎌倉円覚寺、建長寺、浄智寺などの寺院において実地調査を実施した。上述の調査研究により、筆者は中国宋元期以降の禅僧の頂相画44幅を収集した。そのうち像主に言及しているものは24幅に及び、宋代の禅僧が10名（北宋3名、南宋7名）、元代が5名⁽¹⁾、明代が8名、清代が1名である。

頂相は付法信物の一つとして、先代の禅師が弟子に伝授するものであり、法脈継承の証になるものであった。例えば、『仏祖歴代通載』巻二十には「大恵説偈以頂相付師、日有徳必有光、其光無間隔。各實要相称、非青黄赤白」とあり⁽²⁾、『釈氏稽古略統集』巻二には「後帰止

巖処決択、為堂中第一座。後巖以法衣扠子、頂相並偈付之」とある⁽³⁾。また『続伝灯録』巻六にも「(円)鑑時出洞下宗旨示之、悉皆妙契。付以大陽頂相、皮履、直裾、囑曰代我統其宗風、無久滞此、善宜護持。遂書偈送曰……」などの記録が残されている⁽⁴⁾。つまり本稿で扱う史料は上記の文献記載に見える「頂相」の実物ということになる⁽⁵⁾。禪師が弟子に託したこれら頂相には、通常禪師の偈語或いは賛文が載せられている。例えば、円爾弁円が持ち帰った無準師範の頂相には無準師範自身の自賛があり、俊苐が持ち帰った道宣像と元照像には楼鑰が書いた賛文が付されている。また元々、偈語或いは賛文が付されていなかった頂相でも、師弟間の授受による流伝の過程で、嗣法者が高僧や学者に賛を請う場合が少なくなかった。例えば、明菴栄西の頂相には「建仁開山千光禪師頂相、謹書仏光国師所讚之語、以塞仲首座之請」と見え、春屋妙葩の頂相には「智覚普明国師春屋和尚遺像、其徒弟昌縉請賛」と記されており、無涯仁浩の頂相の賛語にも「右無涯浩禪師肖像、住讚州龍光寺徒弟通真請賛」等とあることから禅林の間では「請賛」がしばしば行われていたことが窺える。このように頂相は、禅僧の自画像と偈賛が並存し、図像と文字が表裏をなすという構成になっている。そこから、その禅僧の修行や求道において達した精神的境地、悟りの程度及び後世の評価など像主に関する重要な情報を得ることができる。本稿では主に各頂相に記されている偈賛内容の検討を通じ、その頂相の解説や解釈をめぐる問題、そして創作背景などについて若干の考察を試みたい。

付記：今回の日本訪問は、筆者にとって貴重な体験であり、滞在期間は短かったが、非常に実り多いものであった。今回の訪問に当たっては浙江工商大学の王勇氏、王宝平氏、肖平氏、江静氏、楊寒英氏、水口乾記氏、福田忠之氏、そして日本側の先生である福田氏、原田氏、彦坂氏、和田氏、内藤久義氏、留学生である李利氏、那仁畢力格氏等、多くの方々から多大な支援をいただいた。上記の先生方のご支援とご助力がなければ、今回の訪問調査を円満に終えることが難しかったことは言うまでもない。以上の先生方に改めて深く感謝申し上げる次第である。ただ今回は滞在時間が短く、また自身の語学力の不足により、訪問調査の結果自体は決して満足のいくものではなく、大方の期待に添えなかった点も少なくない。今後は主に日本語の習得に努め、次回再び日本を訪問する際には、より充実した結果を出すことがで

きるように努力していく所存である。

訳者：福田忠之（浙江工商大学）

- (1) 高峰原妙、断崖了義、中峰明本の三名はみな宋末元初の王朝交代期に活躍した禅僧であるが、ここでは学界での一般的な見解に従い、元代に分類する。
- (2) 『大正新修大藏経』（大正一切経刊行会、新文豊出版有限公司、1983年）第49巻、694頁。
- (3) 『大正新修大藏経』第49巻、935頁。
- (4) 『大正新修大藏経』第51巻、499頁。
- (5) 中国では、元来、帝王の将相或いは有名学者や高僧大徳の肖像画を「真」、「真容」、「真影」と称することのほうが多かった。「頂相」が、高僧大徳の肖像を指す用語として、一般的に用いられるようになったのは、かなり時代が下ってからのことであると思われる。



研究発表（1月28日）



円覚寺にて